History of Asahi Ward

旭区

昭和44年の赤川鉄橋

区民による地域史づくり・人づくり

平成22年3月

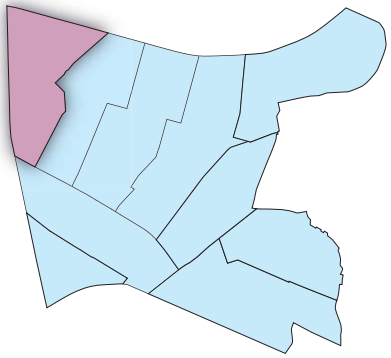
旭区の今昔（いまむかし）を知る会

大阪市旭区役所

地域史

大阪市旭区地域史づくりワークショップ

城北（しろきた）編



旭区地域史

区民による地域史づくり・人づくり　大阪市旭区地域史づくりワークショップ

平成21年度実施地域　高殿・生江・城北

はじめに～地域史について

■この「旭区地域史」は、地域の歴史を発掘する区民の取り組みとして、平成21年5月28日から平成22年3月11日の約10ヶ月間に計10回ワークショップを開催し、その成果として参加者の手によって作成されたものです。ワークショップは、地域史の作成とともに、「知って得する旭学講座」などで積み重ねてきた経験等を活かした人材の育成、活動を通じて地域コミュニティのさらなる向上を図ることも目的としています。

■ワークショップに参加された方は、これまで地域を研究されていて歴史について大変知識のある方から、旭区にずっと住んでおられるが地域の歴史をあまりご存じでない方までいらっしゃいましたが、「地域史をつくる」という1つの目標に向かって一丸となり取り組みました。

■今後は、旭区民が作成した初の「地域史」として、多くの方々に興味を持っていただき、地域のコミュニケーションを高めるツールや学校の教材など、様々な場面で活用されていくことが期待されます。

■地域史の作成にあたり、各種資料をご提供いただいた関係機関の皆様に、心からお礼を申し上げます。

■第1回（平成21年5月28日）

■第4回（平成21年7月23日）

■第5回（平成21年9月8日）

■第2回（平成21年6月18日）
まちあるき（高殿）

■第3回（平成21年6月24日）
まちあるき（生江・城北）

■第6回（平成21年10月9日）

■第7回（平成21年11月12日）

■第8回（平成21年12月3日）

■第9回（平成22年1月13日）

■成果発表会（平成22年2月27日）

■第10回（平成22年3月11日）

地域史 目次

旭区でそれはいつから始まったのか？ …… 3
地域の移り変わり …… 4
城北のテーマ …… 5
ワークショップの活動記録 …… 6
赤川鉄橋 …… 7
淀川両岸一覧 …… 9
日吉神社 …… 14
城北川・遊歩道に取り付けられた
「旭区史跡めぐり」 …… 15
城北（赤川） 今、昔、思いつつ
ブラ歩き …… 18

明治以降の旭区のあゆみ

明治	4年	(1871)	廃藩置県（大阪府を置く） 旭区域は摂津県東成郡に属す
	6年	(1873)	千林小学校創立
	8年	(1875)	淀川修築工事着工 水制（ケレップ）工事が始まる 中村小学校（現、城北小学校）創立
	18年	(1885)	淀川左岸決壊し、大洪水が起こる。翌年にかけてコレラが大流行
	22年	(1889)	市制町村制施行（大阪市発足） 旭区域は東成郡のまま 清水、古市、城北村がこの頃成立。
	29年	(1896)	淀川大洪水 翌年から淀川改良工事が始まる
	43年	(1910)	京阪電車開通（天満橋～五條間） 蒲生・野江・森小路駅開設
	45年	(1912)	この頃、千林商店街ができる。
大正	6年	(1917)	城北村に初の上水道給水
	7年	(1918)	米騒動が起こる
	11年	(1922)	古市・清水小学校創立 関西工学専修学校(現大阪工業大学)創設
	13年	(1924)	古市耕地整理組合設立 城北村で共同浴場開設
	14年	(1925)	大阪市第二次市域拡張 旭区域が市域に編入され東成区に
	15年	(1926)	城北土地区画整理組合設立
昭和	2年	(1927)	京阪国道(現、国道1号)の舗装工事始まる 京阪電鉄にロマンスカー登場
	3年	(1928)	片町～森小路、東野田6丁目～森小路1丁目間で区内初の市バス運行。
	4年	(1929)	区画整理事業による町名変更が行われる（昭和20年まで） 森小路、北船場、大宮で土地区画整理組合設立。
	5年	(1930)	榎並之荘、清水で土地区画整理組合設立。
	6年	(1931)	市電都島～守口間開通 森小路遺跡が発見される
	7年	(1932)	旭区が誕生（東成区から分区） 新森中央公園開園
	8年	(1933)	京阪国道(現、国道1号)開通 京阪電鉄蒲生～守口間高架複々線工事完成
	9年	(1934)	城北公園開園 室戸台風襲来
	12年	(1937)	御堂筋竣工
	15年	(1940)	城北運河（現、城北川）完成
	18年	(1943)	南半分が城東区、一部が都島区となり、現在の旭区となる。旭公園開園
	20年	(1945)	大阪市東北部大阪大空襲（6月7日） 終戦（8月15日）
	24年	(1949)	旭区役所庁舎再建（火災焼失のため）
	28年	(1953)	台風13号による大洪水が起こる
	32年	(1957)	今里～守口間でトロリーバス運転開始 ダイエー1号店が千林にオープン
	38年	(1963)	太子橋中公園開園
	39年	(1964)	城北公園に菖蒲園開園
	43年	(1968)	阪神高速道路北浜～森小路間開通
	44年	(1969)	市電全廃
	45年	(1970)	豊里大橋完成、平太の渡し廃止 旭区役所新庁舎完成 万国博覧会開催
	46年	(1971)	阪神高速道路守口線開通 旭区全域が下水処理区域になる
	48年	(1973)	城北運河魚つり場オープン
	49年	(1974)	城北運河歩行者専用道路完成 大阪市分区により26区に
	50年	(1975)	旭図書館、区老人福祉センター開設
	52年	(1977)	地下鉄谷町線都島～守口間開通 千林大宮、太子橋今市駅設置。
	58年	(1983)	淀川大堰竣工
平成	元年	(1989)	菅原城北大橋開通 大阪市合区により24区に
	2年	(1990)	国際花と緑の博覧会開催
	6年	(1994)	旭スポーツセンター開設
	12年	(2000)	旭区民センター・芸術創造館・旭図書館完成
	14年	(2002)	旭屋内プール、城北市民学習センター開設。

※「ぶらり探訪 旭の見どころ・知りどころ」より抜粋

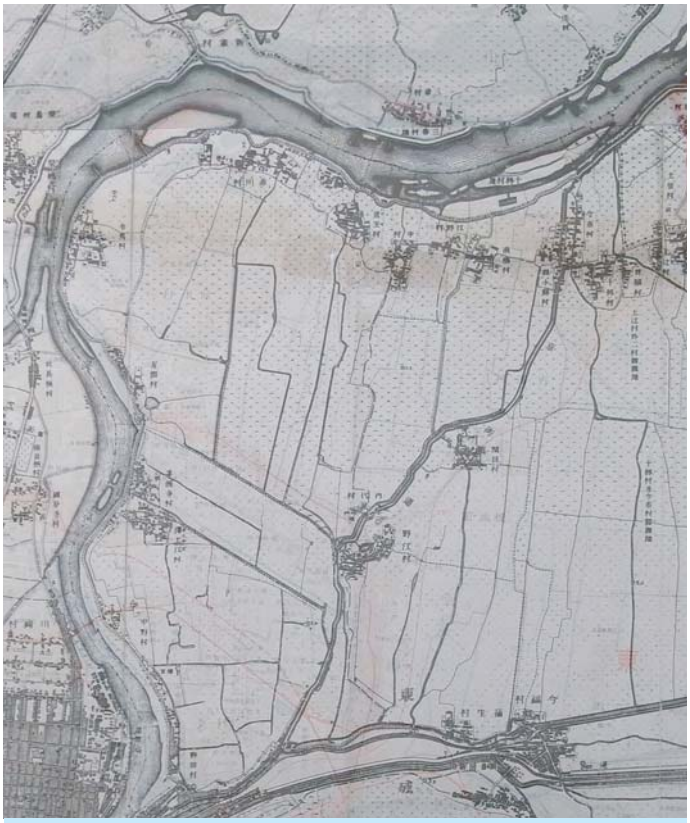
旭区でそれはいつから始まったのか？

資料提供：小井戸茂

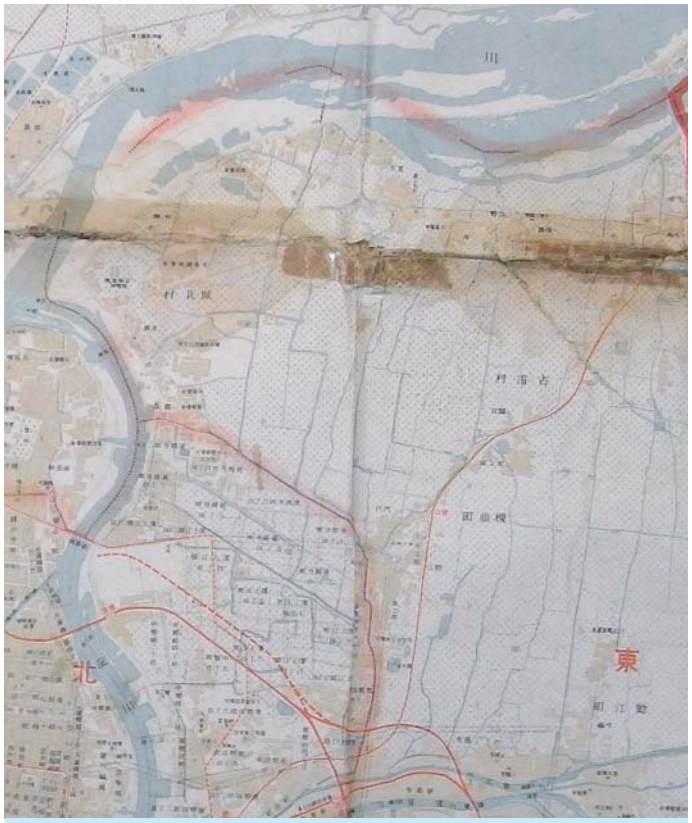
項　目	年　代	摘　　要
電気	明治43年	京阪電鉄毛馬火力発電所より供給開始
水道	大正11年	城北地区一部で送水開始、大正13年に古市・清水地区まで普及
ガス	昭和3年	大阪ガスが旭区へ供給開始、昭和6年に区内全域に供給
私鉄	明治43年	京阪電車開通、森小路駅開設。昭和6年に新線(B線のみ)へ移転
市電	昭和4年	都島本通～今市間開通、昭和6年に今市～守口間開通
市バス	昭和3年	森小路1丁目～片町間運行開始、昭和6年に森小路8丁目まで延長
ﾄﾛﾘｰﾊﾞｽ	昭和32年	守口～今里間運行開始、昭和45年に廃止
地下鉄	昭和52年	谷町線都島～守口間開通
公園	昭和7年	森小路中央公園開園、次いで昭和9年に城北公園開園
郵便局	大正6年	特定局森小路郵便局開局（ただし集配は本局鯰江郵便局）
電報	昭和8年	森小路郵便局で取扱い開始
電話	明治35年	今福郵便局電話分室で交換事務開始
警察署	昭和16年	旭警察署開署、以前は今福、網島、守口3署の管轄
消防署	昭和23年	旭消防署開署、以前は今福消防署の管轄
区役所	大正14年	東成区役所出張所を千林に設置、昭和7年に旭区役所新設
保健所	昭和16年	森小路保健所開所（大宮2）、昭和38年に新庁舎へ移転
税務署	昭和7年	旭税務署開署（野江中3）、昭和41年に新築移転
総合病院	昭和7年	区内にはなし。最寄り大阪高等女子医学専門学校付属病院開院
市民病院	昭和28年	市立城北市民病院開院、平成5年に市立総合医療センターに併合
大学	昭和24年	摂南工業大学発足（半年後に大阪工業大学と改称）
実業高校	大正12年	京阪商業仮開校、公立では昭和12年に第六職工学校開校
普通高校	昭和28年	府立旭高等学校開校（設立当初は府立第48高等学校）
新制中学校	昭和22年	市立旭第一中学校開校、昭和24年に旭陽中学校と改称
小学校	明治6年	組合立千林小学校創立、大正11年に古市・清水両小学校に分離
養護学校	昭和15年	市立思斉学校開校、昭和32年に思斉養護学校と改称
幼稚園	昭和13年	私立新森幼稚園開園、公立では昭和52年に市立旭東幼稚園開設
保育所	昭和8年	市立生江保育所開所
図書館	昭和50年	旭図書館開館、平成12年に現在地に移転
映画館	昭和12年	江南キネマ開館
大相撲	昭和12年	大阪国技館開館（関目は当時旭区）、昭和16年に中止
水都祭	昭和38年	旭区淀川河畔で開催、昭和49年まで。以後天神祭奉賛行事に併合
ラジオ	大正14年	(社)大阪中央放送局放送開始、昭和6年頃から受信機普及
テレビ	昭和28年	NHK本放送開始
地方銀行	大正9年	加島銀行森小路出張所開店
都市銀行	昭和8年	三和銀行森小路出張所開設、昭和13年に支店に昇格
近代工場	明治30年	奥村織布工場開業、旭区の工業の始まり
市場	大正9年	古市村営公設市場開場（後の森小路公設市場）
スーパー	昭和27年	ニチイ千林店発足（赤のれんが改組）、後のスーパーへ
百貨店	昭和6年	高島屋森小路店開店、のち斜め向かいへ移転
近代的国道	昭和8年	国道2号（別名京阪国道）開通　※現在は国道1号
高速道路	昭和43年	阪神高速森小路線開通
運河	昭和15年	城北運河完成（昭和12年に古市橋開通）
渡し船	明治37年	平田の渡し（豊里村営で）。延宝4年(1676)以降個人経営
市会議員	昭和4年	現旭区出身の第1号　寺西圓治郎氏
水洗便所	昭和47年	今福下水処理場完成で実現
町会隣組	昭和15年	昭和22年に解散、現行の制度は昭和50年に旭区地域振興会発足から
現住居表示	昭和46年	町は削除、丁目・番・号制に改正…新地名登場(高殿、新森、清水、太子橋)

地域の移り変わり

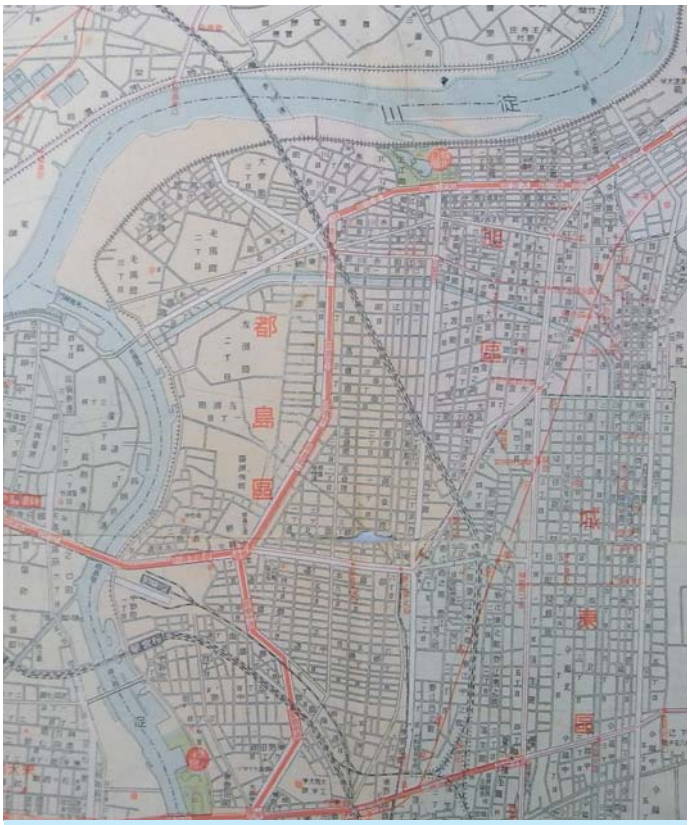
協力：大阪市史編纂所



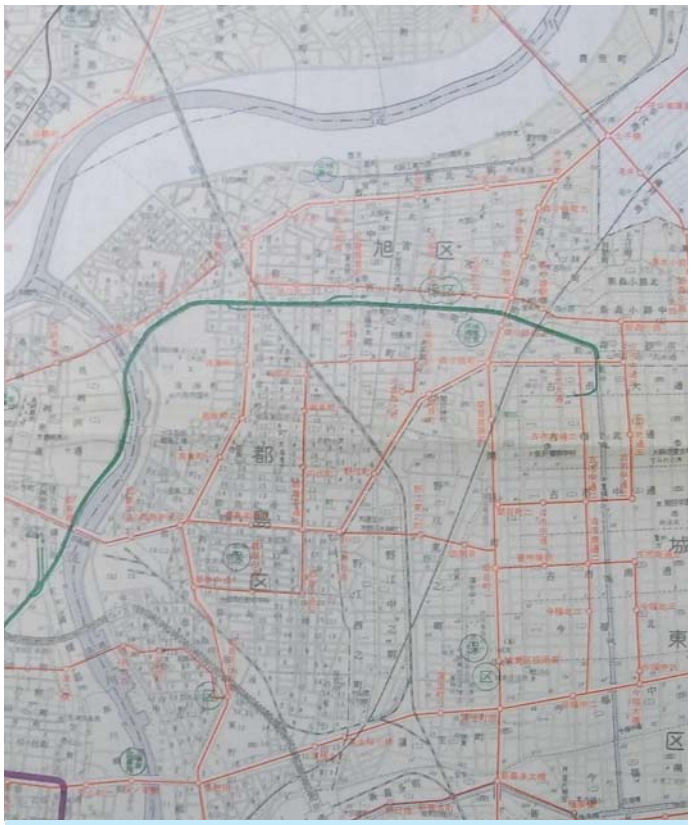
■明治20年（1887年）の旭区周辺 1887



■大正14年（1925年）の旭区周辺 1925



■昭和29年（1954年）の旭区周辺 1954



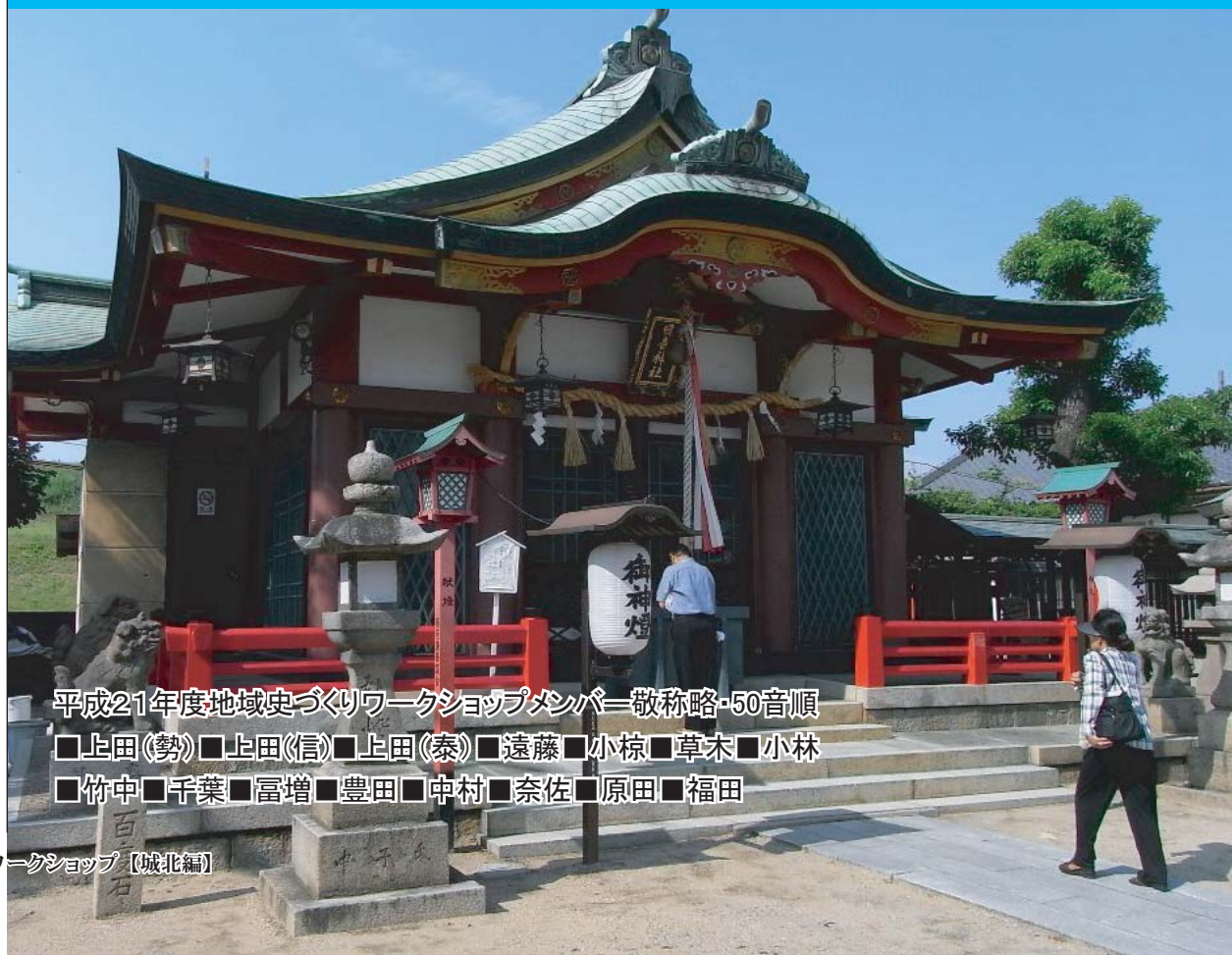
■昭和45年（1970年）の旭区周辺 1970

城北

shirokita

大阪市旭区
赤川1～5丁目

日吉神社（まちあるきの様子）



平成21年度地域史づくりワークショップメンバー―敬称略・50音順
■上田（勢）■上田（信）■上田（泰）■遠藤■小椋■草木■小林
■竹中■千葉■冨増■豊田■中村■奈佐■原田■福田

ワークショップの活動記録

ワークショップ開催日	議論のポイント・内容
第１回　平成２１年５月２８日	「進め方について～年間のプログラム」 「知りたいこと・知っていること・してみたいこと」
第２回　平成２１年６月１８日	「高殿のまちあるき」
第３回　平成２１年６月２４日	「生江・城北のまちあるき」
第４回　平成２１年７月２３日	「担当テーマを決める１」 「キーワードを出す」「まちあるきの整理」
第５回　平成２１年９月８日	「河川施設の見学」「担当テーマを決める２」
第６回　平成２１年１０月９日	「持ち寄った資料を束ねる」「発表会について」
第７回　平成２１年１１月１２日	「地域史紙面レイアウト１」「発表会について」
第８回　平成２１年１２月３日	「地域史紙面レイアウト２」「発表会について」
第９回　平成２２年１月１３日	「地域史紙面レイアウト３」「発表会について」
成果発表会 平成２２年２月２７日	旭図書館多目的室において、 地域史づくりワークショップ発表会 「旭区　いま・むかし」を開催

まちあるき【生江・城北】

プログラム

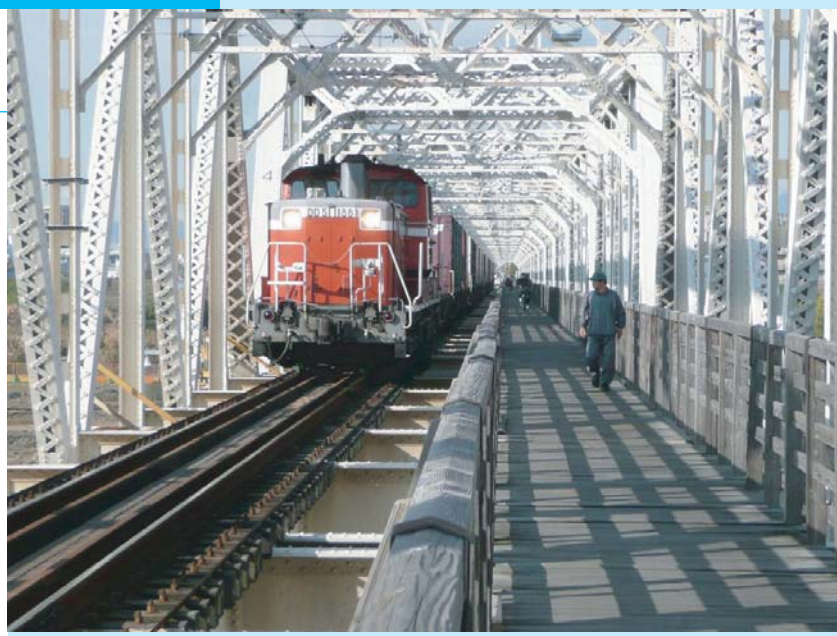
1. 地域史づくりのワークショップに参加して
2. 城北川ぶらウォーク
3. 柳通りの今昔
4. 旭図書館の資料紹介
5. 市史編纂所のご案内
6. 区民のオアシス城北公園
7. 大宮神社の参道・一の鳥居

第10回　平成２２年３月１１日	「成果発表会のふりかえり～ これからの取り組みについて」「地域史の最終校正」

人が通れる鉄橋

赤川鉄橋

城東貨物線



■赤川鉄橋

子供の頃から自転車で通ることのできた「赤川の鉄橋」は正式の名前を「淀川橋梁」といいます。
東海道線の支線、城東貨物線の都島信号所と吹田信号所の中間に位置しています。
城東貨物線は大阪市内を通る譲渡線の貨物専用別線として、昭和４年３月１５日（１９２６）に開通し、複線として計画されましたが単線で開業しそのまま推移しました。
その後更に南下し、阪和線の杉本町までを阪和貨物線として貨物輸送を行っていました。

昭和元年３月１５日（１９２６）の開通で、複線の下路ワーレントラス橋として建設されました。橋桁は支間33mのものが１８連架けられています。桁は汽車製造ｋｋと川崎造船ｋｋで９連ずつ作られた国産です。
当時、建設工事を直接担当された鉄道技師椋本修三氏の口述された記録があります。
「城東線（今の環状線）は当時貨物列車も運行していました。いずれ混雑が予想されることから、旅客と貨物を分離する必要がありました。その際複々線にするには、市街地でもあり費用が莫大であることから、別線で市の東郊外の線路が選定されました。これが今の城東貨物線です。
同じ頃大阪駅も地平から高架線の旅客専用として現在の位置に移転する工事も行われていました。
淀川橋梁は、この工事で最も工期のかかることが予想されいち早く着工、橋脚の基礎工事には当時としては先進的な機械力が使用されました。

■赤川鉄橋親柱

鉄橋は重要河川である淀川を直角に横断するよう、線路方向が決められました。このため当時の国道１号線（その頃は京阪電車線が併行していました。今の都島通りです）との交差部で半径1006mの大きなカーブでやや東に向き、直角に淀川を渡ってすぐ亀岡街道との交差部手前で半径503mのカーブで西に方向を戻しています。

この線路は将来の市街地化を予想して、高架線にすることにしましたが、まだ用地費が安いことから、盛り土で構築することが原則でした。鉄橋の旭区側の盛り土には、当時河川改修工事中でしたから、そこで発生した土砂を利用することにして内務省（国交省）に委託して工事をしてもらいました。

左岸から、放出までは当時は水田地帯で「クリーク」が縦横にあり測量の時に「クリーク」をわたるため大回りをするなど困ったことや、地質も悪く盛り土などの沈下対策が大変でありました。・・・」この記録で当時の赤川・城北地区の様子を知ることが出来ます。

国土地理院の地図は鉄橋開通前後の地形図です。

区画整理の進捗や淀川の制水堤の様子などがよく判ります。まだ城北公園は出来ていません。
今の公園の池は旧本流の名残です。
現在、向岸で旅客線化の工事が進められていますが、いずれこの地区でも開始されるでしょう。
そのとき、掘削される盛り土を見れば淀川の古い堤防の土が観察できるのが楽しみです。

■開通前：大正14年地図（資料：大阪市史編纂所）

鉄橋は、片線を「赤川仮橋」を名付けられ歩道として整備されていますが、いずれ「おおさか東線」として複線の旅客線になります。その時はどうなりますか。
鉄橋として十分な強度を有していることから、測道が併設されることを願いたいものです。
費用については、広く市民からの浄財や、子孫にも及ぶ「エコ市民債権」の発行など、新しい知恵を出したいものです。

■開通後：昭和9年地図（資料：大阪市史編纂所）

また新しい旅客線に赤川鉄橋停留所（城北公園から500m）でも出来れば四季折々のお客様にご利用願えると思いますが。＜草木陽一＞

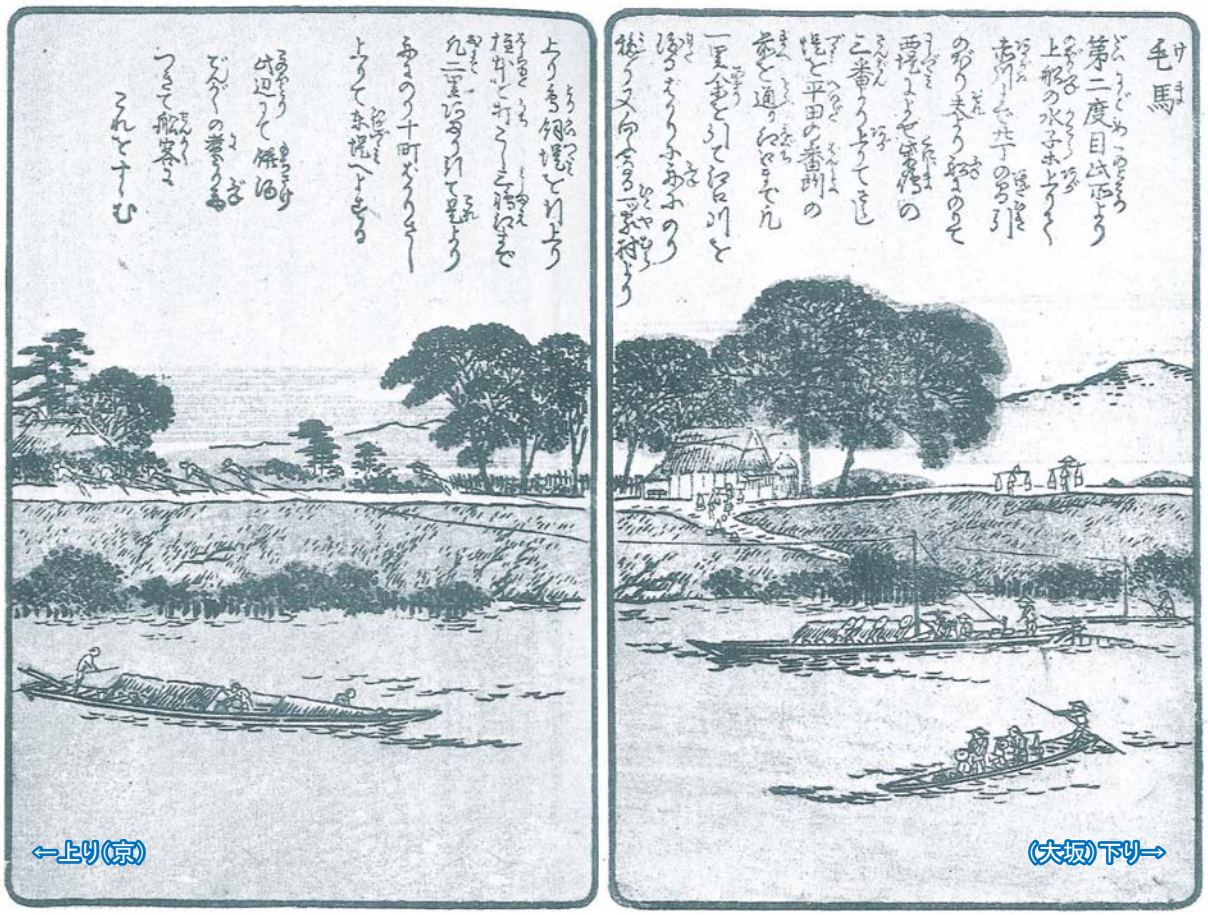
淀川両岸一覧

文久元年(1861)年発行（当時の豪華観光ガイド本）

上り船の部　毛馬・赤川より

この毛馬の絵図は淀川の毛馬の対岸、大川西側西成郡北長柄村から東側東成郡毛馬村の毛馬の渡しあたりを描いたもので、右側の図には渡し場に下って行く坂道があります。

毛馬



■毛馬「淀川両岸一覧」（資料：淀川河川事務所）

手前の船は渡し舟で、笠をかぶった客は荷物を背負ったまま立って乗っており、天秤棒を担いだ客も、天秤棒を担いで立って乗っています。荷物を濡らさない様に又荷持の底が船底の不安定なところに載せると荷崩れが起こってはいけないために立って乗っているのだとおもわれます。

真ん中の大きな長い船は、京に上る三十石船[注1]で、屋根[注2]があり、屋根には旅人の笠が括り付けられていて、船頭が一人舵を操っています。
その向こう側には小さな船を船頭が棹で船を操っているのがみえます。

この渡しの江戸時代の場所は分かりませんが、明治１８年の地図で確認しますと毛馬村の村内の南はずれで、この絵図が描かれた文久元年とあまり場所がかわらないとおもいます。渡しの長さは１９０間(約３４２m)です。

堤上の街道（淀川左岸堤防を利用した古い京街道）の右側には天秤棒を担いだ人が荷物を運んでいるのがみえます。その後方の山は生駒山だと思われます。

■生駒山（平成21年11月14日　大阪工大より東方を撮影）

毛馬の左側の図の淀川には下りの三十石船があり、船頭一人が棹か艪で船を操っているのが描かれています。
堤上には右の図の三十石船の曳柱［注3］の先端に縄をかけ引っ張っている五人の人がいます。
三人は三十石船の水子（読み＝かこ＝水夫）で残りの二人は毛馬付近の流れの速い所の船曳専門の人夫だと思われます。

三十石船の描かれてる絵図を見ると大坂の町の橋のそばを通っている三十石船には帆柱が描かれていないので天満橋・川崎の渡しを過ぎると上り舟は帆柱を立てるのだと思います。
堤上で一人で船を引っ張っているのは右の図の奥の小さな船の水夫又は船曳専門の人夫だとおもわれます。

［注1］
三十石船は、元禄年間（1688～1703）、長さ56尺（約17m）、幅8．3尺（約2．5m）、乗客28人、水夫（加子＝船子）4人。早草登人乗三十石船は、長さ15間（約27m）、幅2間余（約3．6m）。平成17年8月、旭区まちづくり連続講座「知って得する旭学」の淀川の歴史では、三十石船は長さが約30m、幅約6mくらい・・・時代によって大きさが違います。

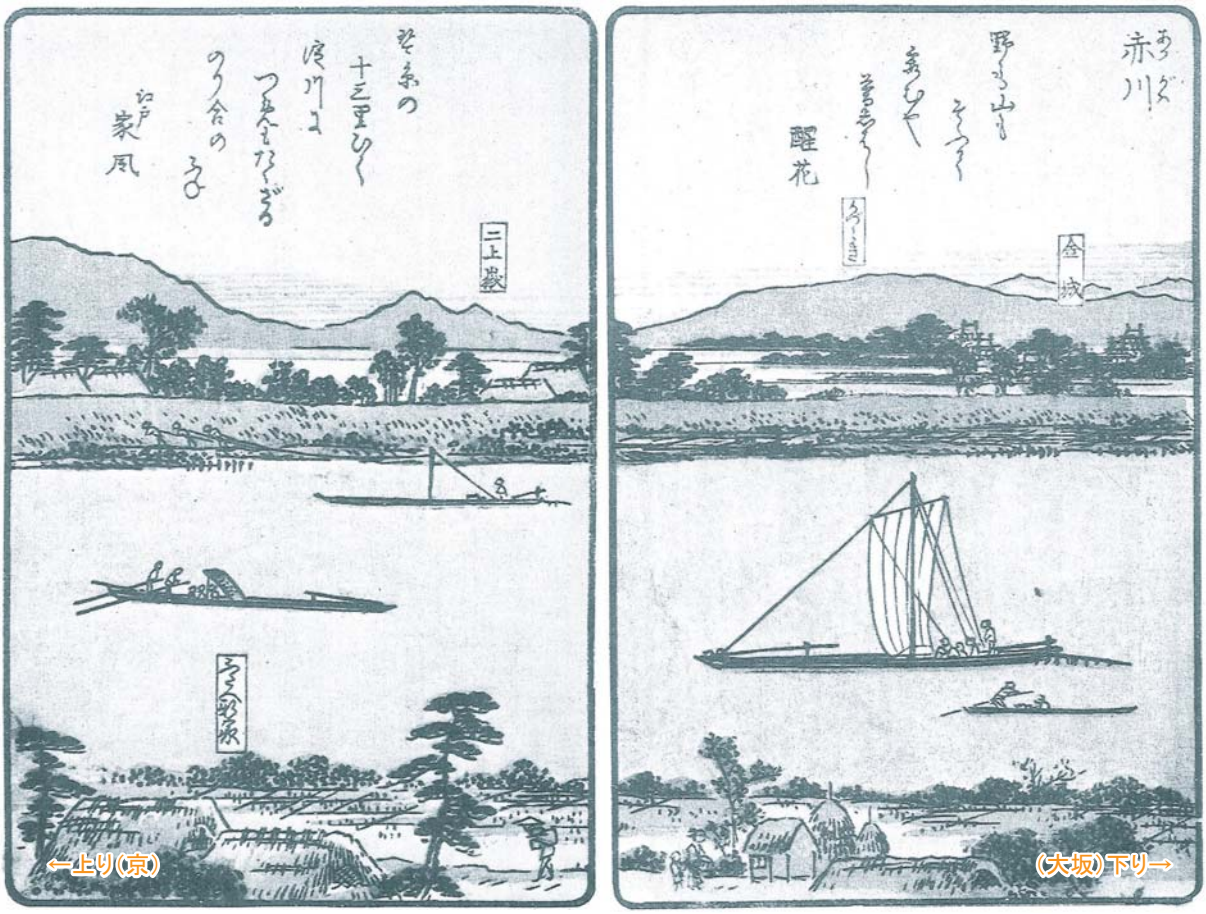
［注2］
屋根は苫葺き・・・苫とは、菅や茅などをこものように編み屋根をおおったもの。◎三十石船の苫は片面に4枚の計8枚。1枚の長さは1間（約1．8m）、幅半間（約0．9m）。雨や水を避けるために桐油（油桐の実からしぼった油）紙をひきました。

［注3］
三十石船の場合は曳柱と言っていたらしいです。三十石船が帆を張っていたかどうか、今、調べています。

■三十石船
（資料：財団法人　アダチ伝統木版画技術保存財団）

次の赤川の絵図は、東成郡赤川村の対岸の西成郡二重新家（新家村、現在の東淀川区菅原町）付近の内側から描かれた図です。

赤川



■赤川「淀川両岸一覧」（資料：淀川河川事務所）

手前には新家村の家や豊里街道（淀川右岸の堤防）を笠をかぶって荷物担いで平田・江口方面に向かっている人が描かれています。
右手前の淀川には小さな下り舟と帆を張った大きめの上り舟があります。

このころの淀川は平田から赤川付近まで丁度西向きに流れていて、平田付近から赤川付近まで流れが緩やかで西風のいい時は、帆を張って川を遡っていたそうです。

《平田には淀川対岸東成郡今市村との間に平太の渡があり中島街道から大坂に向かう重要な渡しとなっていた。そこには淀川上り川舟改の番所［注5］（平田の番所）が置かれていたため平田の渡し［注4］とも称された（摂陽群談》上り舟は赤川付近から帆を上げ、平田に大宮があって、その社叢（神社の森）は大宮の杜といわれ淀川を上る船はこの杜を目印に受けて上り、平田辺りで一度帆を降ろし守口浜から帆を逆に揚げて・・・・》

と資料にあります。
平田の番所のその他の役目は淀川の浚渫もあったそうです。大宮の位置は大体判るのですが、番所の場所や大きさや役人の人数などが判りません。

つづいて、淀川の向こう側は赤川村で、左の図の下り舟には船頭二人が棹又は艪で船を操っています。後方の川岸には上り舟の三人の水夫が帆柱の先端に縄をかけ、船を引っ張り船頭が舵を操っています。
三十石船の乗組員は四人で上り舟の場合は水夫の引っ張り役が三人と操船役１人とわかります。毛馬の引っ張り役の五人の内二人は引っ張り専門の人夫だと毛馬の絵図と比べれば判ります。

向こう側の堤は淀川の堤を利用した古い京街道で、右側の図の右後方に金城（錦城・・大坂城）の櫓が描かれています。
現在の赤川の堤防から南を見ると中央区城見のツインビルがみえます。
その少し向こうが大阪城です。但し、このころは天守閣は無く櫓だけです。
左のかつらぎとかかれていますが、葛城山なのか葛城地方なのかわかりません。左側の赤川村には四軒の家の屋根が描かれています。
この家の位置は淀川の改修の後、現在、淀川になっています。後方の山は二上嶽（二上山）で後方の山の中に金剛山と書かれていないのが不思議です。

毛馬・赤川の絵図の後方の山や櫓は手前に川筋より大きく描かれています。
江戸時代の後期の絵図ですが、毛馬・赤川を知る貴重な資料です。

毛馬の絵図の中の文章は（第二度目、此所より、上船の水子等上りて、赤川まで廿丁の間引きのぼり、夫より船にのりて、西堤によせ、柴島の三番より上りて、さらし堤を平田の番所の前を通り、江口まで、凡一里余引きて、・・・）
（訳・・毛馬より水夫達が川辺に上がり、赤川まで廿丁（約２１８０m）引き上り、水夫船にのって、対岸の西堤に船を寄せ、柴島の三番より川辺に上がって、さらし堤を平田の番所の前を通り、江口まで、凡一里（約４ｋm）余を引きて・・・）

■二上山（山並み中央）
（平成21年11月14日　大阪工大より南方を撮影）

■大阪ビジネスパーク方面
（平成21年11月14日　大阪工大より南方を撮影）

[注4]
平田（へいだ）の渡しの「平田」は明治時代の淀川改修から昭和45年に豊里大橋が出来るまでの現淀川にあった西成郡豊里村の村営の渡し。のち府営、そののち大正時代の終わりに大阪市営。平太（へいだ）の渡しの「平太」は江戸時代から明治時代の淀川改修まで（旧淀川）の渡船業者の屋号。尚、江戸時代の資料に「平田の渡し」とあるのはまちがいではありません。当時は音（おん）が合えばよかったので。

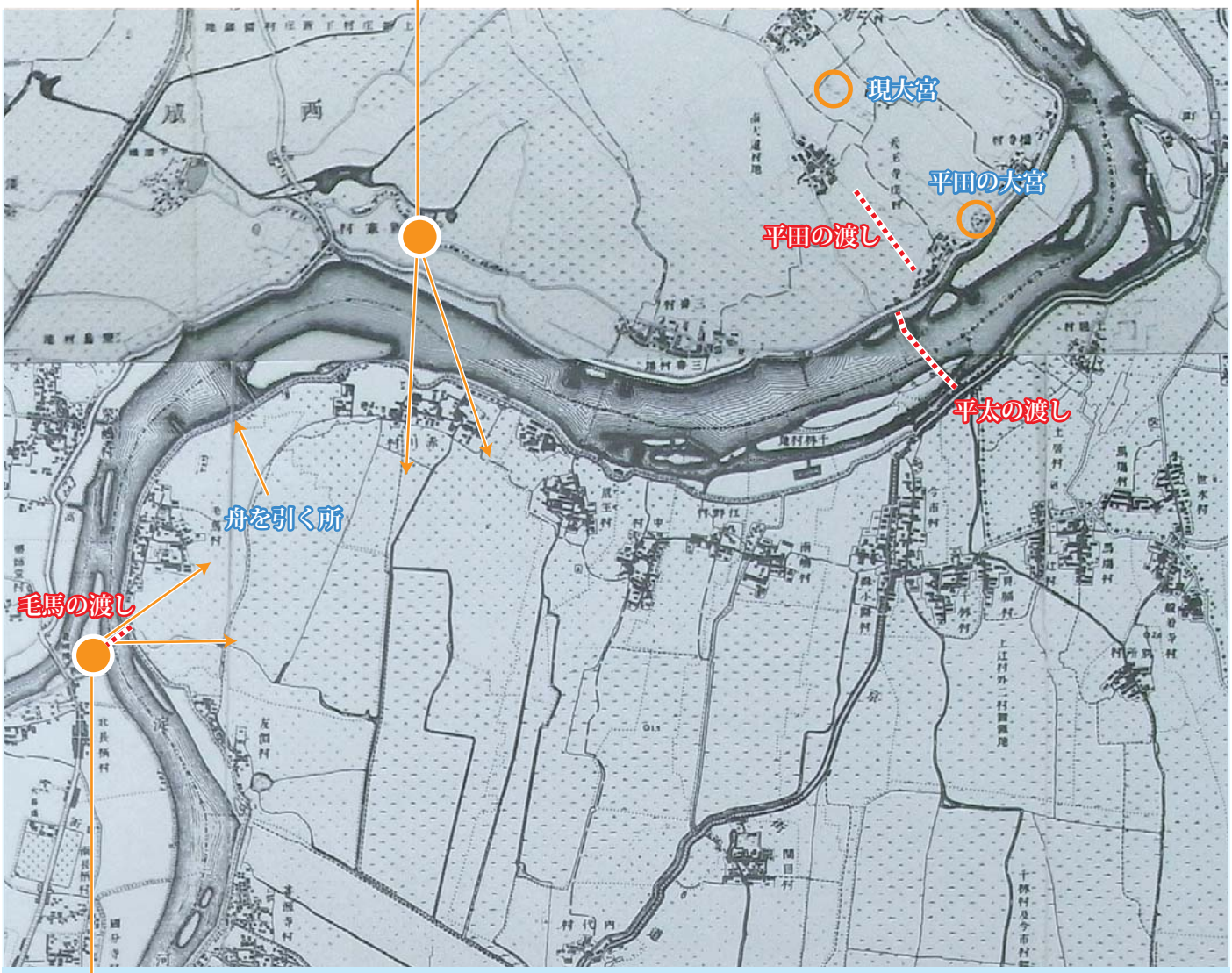
[注5]
船番所。枚方宿の場合は過書船・伏見船船番所（船の監視、船切手の交付、積荷と船切手の照会、上米の取立てなど。）。延宝期（1673～1680年）、大坂の地図の天満橋北詰の船番所の敷地は小学校校地の半分位の広さです。

■対岸左側、東淀川区菅原（西成郡新家村）を旭区生江側より
平成21年11月7日撮影。（水上バスは大阪市のイベントのため航行している）

■平田の渡し[注4]（写真：旭区ホームページ）

この写真は、昭和45年3月3日「平太の渡し」廃止の日の写真です。豊里大橋の完成により淀川に最後まで残っていた渡し船がなくなりました。
（旭区ホームページより）

淀川両岸一覧「赤川」絵図が描かれた地点



■毛馬・赤川絵図の視点場（地図　明治20年　資料：大阪市史編纂所）

淀川両岸一覧「毛馬」絵図が描かれた地点

〈上田勢至郎〉

日吉神社（ひよしじんじゃ）

赤川鉄橋より少し東、赤川寺という大寺院があり、室町時代文安年間に山王宮と称して近江の日吉神社の御分霊を祀った神社があったといわれており、それがこの神社であるといわれている（また、当時の赤川寺は四天王寺に匹敵（ひってき）する、大伽藍（だいがらん）があったという）。

■赤川廃寺跡碑

赤川寺は洪水や大坂夏の陣等の戦乱により廃寺となったが、この神社（正しくはヒエ神社）は類焼をのがれ、戦前迄は本殿拝殿、絵馬堂があり氏神様として崇敬されてきましたが、空襲で殆どが焼失。しかし、その後復興され、現在に至っています。

（明治３４年には、淀川拡張のため北部を接収されました。約２００ｍ南へ本殿が移され、現在の御鎮座地となり、また、明治初年に山王宮から日吉神社に改称されました。御祭神は須佐之男命－大年神－大山咋神　穀物の守護神である）

〈竹中靖子〉

■日吉神社でのスナップ（平成21年6月24日の「まちあるき」にて）

散策に花を添える壁画

城北川・遊歩道に取り付けられた「旭区史跡めぐり」

【はなしょうぶ】 旭区の花　花言葉／やさしい心

■城北　花菖蒲園（写真：上田泰彦）

アヤメ科アヤメ属の一種で、日本に自生する
ハナショウブから改良されたものです。
葉は細長く剣状で、初夏のころ大型の赤紫・濃紫・淡紫・白色など美しい花を付けます。

城北川壁画に込められた旭区史

【京街道】

大阪城京橋口（のち高麗橋）を起点～京へ通じる古くからの主要な道路。
豊臣秀吉が文禄年間（1592～1596）に淀川左岸の堤防を改修し、堤防上に陸路を開いたのが経路。
江戸時代には、参勤交代の大名行列なども往来。

■城北川（写真：上田泰彦）

【菖蒲園 生江3丁目】

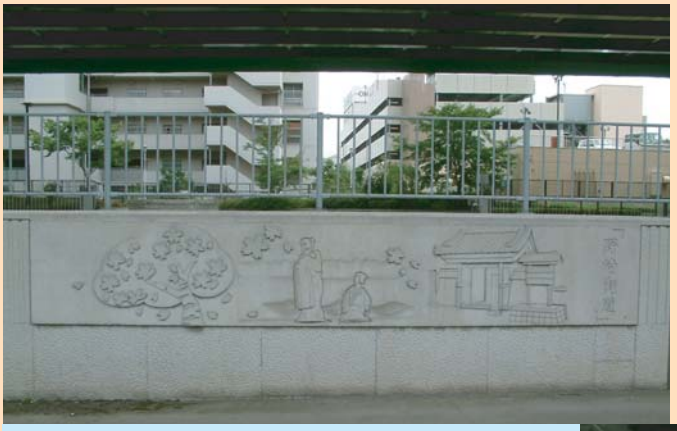
昭和39年開園、毎年6月ごろに250種、13,000株のハナショウブが咲き、秋には「菊花展」が開催され美しい懸崖菊を見ることができます。

■城北川（写真：上田泰彦）

【剣街道】【野崎街道】

街道関連記事は『東成郡誌』清水村より街道をみる。
にまとめました。
京街道・中高野街道・野崎街道・剣街道
『東成郡誌』より

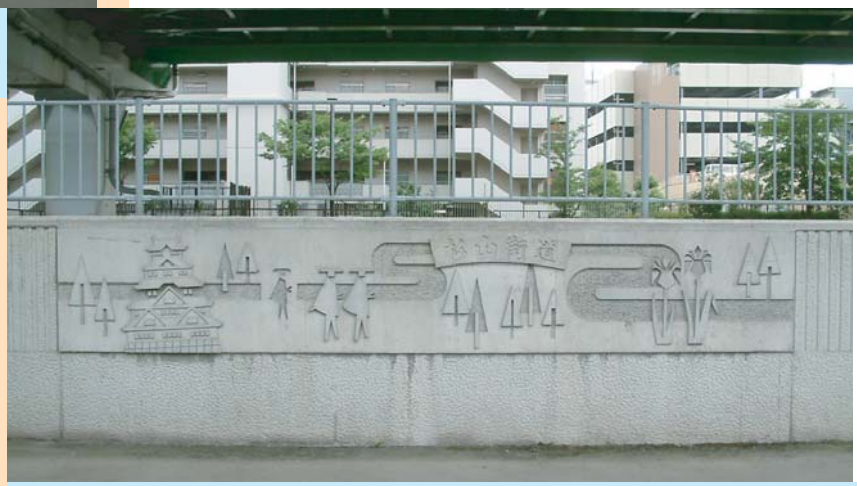
■城北川（写真：上田泰彦）



■城北川（写真：上田泰彦）

【杉山街道】

杉山街道は、もとの古市村大字森小路字蒲生で京街道から分岐していた道路幅１間半（2.7m）の街道。南に行くと大阪城近くの杉山の東方を通ることから、この名前がつけられた。「旭区史」より



■城北川（写真：上田泰彦）

【平太の渡し跡 】
太子橋1丁目 淀川堤防上

延宝4年（1676）ごろ、個人経営の渡し船として発足。昭和23年4月から大阪市の直営となり、周辺部の都市化で利用者が急増したが、豊里大橋の開通にともない昭和45年3月3日に渡船場は姿を消す。
石碑の「平太」は渡船業者名であり、一般的には地名である「平田」と呼ばれている。

■城北川（写真：上田泰彦）

【千人つか】

昭和20年の大阪大空襲で、市内のいたるところに身元不明の遺体が多数放置されていました。それらの遺体は市民奉仕で城北公園裏の淀川の堤防に集められ、千数百体の遺体がだびにふされました。
遺骨は土中に葬られ、いつしか雑草に埋もれて忘れ去られようとしていました。
これを見た区民の方が、庭石に「千人つか」と刻んで遺骨の眠る上に置き、その冥福を祈って安置されたのが由来であります。

■城北川（写真：上田泰彦）

■城北川（写真：上田泰彦）

【淀川わんど】

明治時代、船が安全に往来できるよう「ケレップ水制」（水 の流れを制御するための構造物）という工事がおこなわれる。この水制に土砂が堆積し、本流と隔離された小さな池が連な って「ワンド」という独特の地形ができる。

【豊里大橋】

都市計画道路。新庄大和線（大阪内環状線）、全長0.9km 幅18mの大橋で昭和45年3月3日完成、型式は斜張橋。その陰 では、橋の完成で「平田渡し」が廃止になる。

〈福田輝雄〉

■城北川（写真：上田泰彦）

■参考『わがまち　旭』より　　発行　大阪市旭区役所　区民企画室

城北（赤川） 今、昔、思いつつ ブラ歩き

秋の日、地域史づくりのメンバーが城北公園に集まった。この公園も淀川改修前は川の中であった。春は梅（老木）、桜、花菖蒲、秋、菊花展。池では鯉・タナゴチモロコ、釣り人、冬はカモ・ユリカモメが遊ぶ、多くの人達の憩いの場所。

■城北公園（平成21年6月24日の「まちあるき」にて）

淀川の堤防に登り千人塚にまいる。菅原城北大橋はワンド群やヨシ原など周囲とマッチする。斜張橋の橋上からは日出・夕日の美しい景色・大阪市内を一望できるスポット。
明治時代、船が安全に往来できるように淀川がケレップ水削工事で改修された。ケレップ水削工事により、土砂が体積し本流と隔離され出来た池ワンド群を見る。堤防にはワンドに生息する魚類の看板をみる。淀川左岸を下り、赤川方面へ。昔の赤川は、淀川の中のアシや水草の生い茂った所であった。淀川の上流から運ばれた泥砂によって出来、一面が湿地となった。土地が低く湿地が多いため、淀川のたびかさなる洪水で田畑、家が流された歴史。

■菅原城北大橋
（平成21年6月24日の「まちあるき」にて）

■赤川廃寺跡碑
（平成21年6月24日の「まちあるき」にて）

赤川廃寺跡碑（昭和3年半淀川左岸で弥生式土器須恵器をはじめ遺物が護岸工事が完成しておらず川岸に遺物を含む土層が露出していた）をさらに下り赤川鉄橋へ。戦前からあるトラス型の古いもので人と列車が渡る珍しい鉄橋。堤防下では昔なつかしい（昭和30年頃～）ラーメン屋台が数台並んでいる。終戦すぐに住む家に困り市バスを並べて市民が住んだ処だ。
日吉神社を参拝。古い家が多く残っているこのあたりの場所を見ながら城北小学校へ。1895年（明治8年）、重誓寺から中村小学校に開校してその後転々として1902年（明治35年5月2日）現在地へ。城北小学校創立記念日とし５教室から始まった。
赤三商店街を見て回り、元生江青少年会館で休憩。歩いた処を思い出し話し合った后解散。
＜遠藤雄次郎＞

memo メモ

旭区地域史
区民による地域史づくり・人づくり　大阪市旭区地域史づくりワークショップ
【城北編】
平成22年3月
■編集／旭区の今昔（いまむかし）を知る会
■発行／大阪市旭区役所総合企画担当
■協力／総合調査設計株式会社

この冊子は、区民の方が中心となって現地確認、聞きとりなどの調査、情報収集をして作成しました。

旭区の今昔を知る会からのお願い

旭区の地域史づくりにご協力ください。

旭区の歴史を子どもたちに残すため、みなさんが持っておられる古い写真や資料をお貸しください。

■江戸時代や明治時代から昭和40年代頃までの、旭区の風景、行事などを写した写真、又は古い資料や道具などなんでも結構です。

■お借りしました写真や資料等は大切に取り扱い、写真データ等におさめた後、返却いたします。

■お借りしました写真や資料等は、地域史作成のための資料や地域史に掲載させていただくほか、旭区役所が実施します各種事業に使用させていただく場合がありますので、ご了承をお願いいたします。
なお、地域史は今後数年かけて作成する予定ですので、お借りしました資料等の掲載にはお時間がかかることがあります。
詳しくは旭区役所総合企画担当までお問い合わせください。

「旭区の今昔（いまむかし）を知る会」とは

平成１８年度から公募で集まったメンバーで、区内１０地域の身近な歴史や思い出などをとりまとめて、順次「地域史」を作成しています。本会では、地域史の作成を通じて、これまで積み重ねてきた経験等を活かした人材の育成、コミュニティのさらなる向上を目指すものと考えています。

平成22年3月

本内容に関するお問い合わせは
大阪市旭区役所総合企画担当まで
tel 06 (6957) 9683